

## 「大神神社初詣と三輪山登拝」

### 1. 大神神社御祭神 三輪山の大神主神と出雲の大国主神とは同神

7世紀後半の斉明朝に出雲の信仰が大和に及び、「出雲国造神賀詞」によると大己貴神(おこなむち・大国主神の別名)の幸魂(さきみたま)・奇魂(くしみたま)を八咫鏡に取付け倭の大神主神と名を称えて三輪山(神奈備山)にお祀りしたとある。

日本書紀では、大国主神は少彦名神と力を合わせて国造りをしていたが、ほぼ完成という時に少彦名神は国造り半ばで常夜国へ帰ってしまう。それで大国主神が悩んでいると、海上を照らして寄り来る神がいた。「吾は大国主神の幸魂・奇魂であり、吾を大和の東の青垣に祀れば国造りに協力してやろう」と言った。その神が御諸山(三輪山)に鎮座している大神主神であるという。

三輪山がご神体であり大神神社には本殿はない。山頂の奥津磐座が大神主神される。

### 2. 『日本書紀』御間城入彦五十瓊殖天皇(みまきいりびこいにえ)崇神天皇の条

第十代崇神天皇の時代、天変地異と疫病の蔓延によって、人口が半減するほどの悲惨な状況が大和を襲ったという。

困り果てた崇神天皇は、占ってみると、出雲の神・大神主神が「私の意志だ」と打ち明けたという。そして「吾が子大田田根子を探し出して吾を祀らせれば、世は平静を取り戻せるだろう」というので、天皇は早速手配をし、陶邑で探し当て、これを大和に連れてきて、大神主神を祀らせた。はたして神託とおり、大和は平和になったという。

#### 「日本書紀」現代語訳

崇神五年 国内に疫病多く、民の死亡する者、半ば以上に及ぶほどであった。

崇神六年 百姓の流離するもの、反逆する者もあり、その勢いは徳を以て治めようとしても難しかった。

崇神七年 天皇は「占いによって災いを起こる訳を究めよう」といわれ、八十万の神々を招いて占いをされた。この時「倭迹迹日百襲姫命」が神憑りして言われるのに「吾は倭国の域(さかい)の内に居る神で、名は大神主神という。天皇よ、そんなに憂えるな。国が治まらないのは吾が意(こころ)によるものだ。もし吾が子「大田田根子」に吾を祀らせたなら、たちどころに平らぐだろう。」

天皇はあまねく天下に告げて大田田根子を求められた。茅渟県(ちぬのあがた)陶邑で見つかりお連れした。大田田根子は「父は大神主神、母は陶津耳の子・活玉依姫といひます。」と答えた。

天皇は大田田根子を大神主神を祀る祭主とした。ここで疫病ははじめて収まり、国内はようやく鎮った。五穀は良く稔って百姓は賑わった。

崇神八年 高橋邑の「活日」(いくひ)を大物主神に奉る酒を造る人とした。

崇神八年十二月二十日 天皇は大田田根子に大物主神を祀らせた。この日、活日は神酒を天皇に奉り、歌を詠んで言うに

「此酒 我酒非 倭作大物主 醸酒 幾久 幾久」(此の神酒は私の造った神酒ではありません。倭の国をお造りになった、大物主神が醸成された神酒です。幾代までも久しく栄えよ 栄えよ)

日本書紀はつづける。崇神十年九月、四道将軍を西海・東海・丹波・北陸に派遣。同月、天皇のおば「倭迹迹日百襲姫命」を大物主神の妻とするも、尻餅の事故死の後、箸墓に葬る。

### 3. 高橋邑の活日 (いくひ) (活日神社)

高橋邑の場所は天理市の石上神宮の北側を流れる布留川に高橋という橋がある。

「新撰姓氏録」の高橋朝臣条にはもともと膳臣(かしわでのおみ)であったことがみえる。宮廷内の食膳を司る職掌で、味噌の醸造にも関係していた。同じ醸造業である酒造りに通じる。

酒造りは大和の三輪が発祥の地といわれている。「美味し酒、御諸の山」のみむろは酒のもと(諸味・醪)の意味。このことにより高橋活日命は杜氏の神様として、大神神社の摂社「活日神社」に祀られている。記録に残る日本最初の杜氏とされる。

### 4. 茅渟県陶邑(ちぬのあがたすえむら)の大田田根子(大直禰子神社)

大田田根子は茅渟県陶邑(堺市)の陶津耳という朝鮮半島南部からの渡来人・須恵器生産集団の首長の娘、「活玉依姫」と三輪山の「大物主神」との間に生まれたと、「日本書紀」にある。

茅渟というのは、大阪府南部をさす古い地名で、大和王権はこの茅渟の地を直轄地として「縣」を置いていた。この地(堺市・和泉市辺りの泉北丘陵地帯)は須恵器の大生産地であり、そこに陶邑があった。

大直禰子神社は明治の廃仏毀釈までは「大法輪寺」と呼ばれた、三輪明神の神宮寺。室町時代の建立だが、部材に奈良時代のものが含まれていることが判っている。

### 5. 須恵器

茅渟県は五世紀初頭、朝鮮半島南部の洛東江流域の人たちが、渡来して作った須恵器の産地であった。当時最先端の技術で大和政権が独占していた。

陶邑には良質の粘土があり、炭を焼くクヌギやナラなどの落葉広葉樹の樹林が広がっていた。ここは大和王権の直属工房として大規模に生産されていたことが判っている。

同時期、普及していた土師器は800°C位の低温で焼くので割れ易く液体が滲みてしまう。須恵器は1300°Cの高温で焼くので硬くて割れ難い。「据え置く器」を意味し平底で倒れることがなく、液体が漏れだすこともないので、水や酒を入れるのに適していた。

(文責・中井)